



Title	ミメーシスとシンボル：カッシーラー哲学におけるその重要性
Author(s)	岩本, 智孝
Citation	メタフュシカ. 2024, 55, p. 13-24
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100354">https://doi.org/10.18910/100354</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ミメシスとシンボル ——カッシャー哲学におけるその重要性——

岩本智孝

### はじめに

エルнст・カッシャー（1874-1945）は、『シンボル形式の哲学』（以下、『シンボル』）第一巻（1923）の序論において、シンボル概念を提示する際に模写説 [Abbildtheorie]<sup>1</sup> を批判している。カッシャーによれば、模写説とは、〈記号は対象を正確に表現できない〉として記号の力を貶める説のことである（vgl. ECW 11, 41f.）。カッシャーは、記号が対象の素材 [Material] を脱落させていることは認めたうえで、それを逆手に取り、むしろ素材を脱落させているからこそ表現力を獲得しているのだとする。これこそがシンボル的な記号の在り方なのだとカッシャーは言う。

模写——すなわち、ミメシス [μίμησις] ——については、古代ギリシア以来議論が交わさ

<sup>1</sup> 模倣・模写を意味するドイツ語は複数存在する。ここでは、本稿のテーマである Mimesis 以外に Abbild、Nachahmung を取り上げておきたい。Abbild の接頭辞 ab は多義的であるが、そのまま〈模写〉の意味をもつ。Bild は〈像〉である。Nachahmung の接頭辞 nach もやはり多義的で、これも〈準拠・模倣〉を意味しうる（たとえば、Nachdruck 〈再版、複製〉の nach が同様の用法である）。Ahmung は動詞 ahmen の派生であり、ahmen はあまり用いられる動詞ではないが、ausmessen 〈正確に測定する〉と同様の意味をもつ。Abbild と Nachahmung は、それぞれ〈模倣して形づくる〉、〈模倣して正確に測定する〉という意味であり、大きく捉えると、〈元からある対象を再現しようとする〉ことをあらわしている。これらのうち、カッシャーが『シンボル』において多用しているのは、Abbild であるが、„Mimischer, analogischer und symbolischer Ausdruck“ 「ミメシス的、類比的、シンボル的表现」という節の冒頭において、„Gleich der Theorie der Kunst und gleich der Theorie der Erkenntnis löst sich freilich auch die Sprachtheorie nur allmählich von dem Zwang des Nachahmungsbegriffs und der Abbildtheorie los.“ 「芸術理論や認識理論と同様、言語理論もまた模倣概念や模写説の束縛から解放されるのに、もちろんひどく手間がかかった」（ECW 11, 133、イタリック、傍点は引用者による）と述べており、少なくとも『シンボル』において、Mimesis、Abbild、Nachahmung のあいだに明確な区別はないと言える。ただし、カッシャーが用いている mimisch の語は、Mimesis の祖語で、古代ギリシア語で〈舞踏〉あるいは〈舞人〉を指す μῆμος/mímos に由来し、Mimesis から直接派生した形容詞 μῆμητικός/mímētikós 〈ミメシスの〉に対応するドイツ語の mimetisch とは類縁関係はあるが、系統は少し異なる（cf. 加藤 1994, 76-8）。だが、カッシャーの当該箇所を参照している Matherne (2021) や Endres (2021) が、mimisch に対応する mimic ではなく、mimetisch に対応する mimetic を用いているように、少なくともこの文脈において両語は入れ替え可能だと考えてよい（cf. Matherne 2021, 144, Endres 2021, 124）。以上の経緯から、本稿の引用以外の部分では、原則として〈ミメシス〉の語を Abbild や Nachahmung に代えて使用するものとする。

れてきた。プラトンは、芸術の本質をミメーシスであるとしつつも、詩人が実際には表層的なミメーシスで終わっており、真理のミメーシスは困難であるとしてこれを斥けようとした（cf.『国家』第10巻）。

ミメーシスと言うと、話題が芸術や文学に限定されるように思われるが、カッシーラーは、言語理論にも適用されるテーマであるとしている（vgl. ECW 11, 133）。加えて、言語、神話、芸術、科学などの広範な領域にまたがるシンボル概念を提示するためにミメーシスを引き合いに出したことからも、カッシーラー自身が明言しているわけではないが、ミメーシスもまた領域横断的な概念だと捉えるべきである。つまり、カッシーラーにとって（少なくとも『シンボル』序論においては）ミメーシスとシンボルは記号に対する捉え方として対置されている。そして、冒頭に挙げた当該箇所を見るに、カッシーラーは、〈記号は事物を写し取るもの〉だとする記号のミメーシス的な捉え方を斥け、〈記号は事物を捨象することではたらくもの〉だとする記号のシンボル的な捉え方を打ち出しているように思える。

しかしながら、『シンボル』の他の箇所からは、シンボルの重要性は言うまでもないことだが、けっしてミメーシスの重要性を否定しているわけではないことが読み取れる。そこで本稿は、『シンボル』におけるミメーシスの重要性、およびミメーシスとシンボルの関係について明らかにすることを目標とする。

### 1. カッシーラーの模写説観

本節では、カッシーラーの模写説観を概観していく。カッシーラーが言うところの模写説は、現実は個々の感覚や直観においてすでに完成されたものとしてわれわれの前にあらわれていると考える。そして、言語に話題を限って言えば、言語音声がまったく異種の媒体としてその現実を表現する（vgl. ECW 11, 42）。以上が模写説の前提である。これにより模写説は、媒体としての記号に対して否定的な見方をとるようになるとカッシーラーは言う。

もし記号が直観や表象の内容として出来あがっている特定の個別的内容をただ反復するだけのものだとしたら、現存しているもののそうした単純な模写によってなにがなされるのかも、また真に厳密な模写がいかにして達成されうるのかも見てとることはできないことになろう。なぜなら、模写はけっして原物には達しえないし、精神の考察の目をくらまして模写が原物に取って替わるなどということのありえないことは明白だからである。それゆえ、そうした規準を前提にするならば、ひとは必然的に記号一般の価値に対する原理的な懷疑に導かれる。（ECW 11, 41f.）

以上のように特徴づけられる模写説は、しかし、誰によって唱えられた理論なのかについてカッシーラーは言及していない。ここでカッシーラーは、一般論として模写説が読者に共有されているという前提のもとで議論を進めているのである。ゆえにカッシーラーの模写説観を再構成するためには、読者であるわれわれの手でミメーシスに関するカッシーラーの発想の根源を少なくと

もある程度素描しておくことが要求される。

カッシャーが『シンボル』の序論で最初に言及しているプラトンは、ミメーシスを哲学の議題に挙げた最初期の哲学者である。プラトンは『国家』第10巻において、寝椅子の例を挙げている。寝椅子には、神が創造した本性としてのたった一つの寝椅子（すなわち、寝椅子のイデア）、職人の手になる寝椅子、画家によって描写された寝椅子の三種類存在するとソクラテスは言う（cf.『国家』597D-E）。そして、ソクラテスは、画家によって描写された寝椅子は、職人の手になる寝椅子の見かけを真似たものにすぎず（cf.『国家』598A-B）、真理から遠ざかっていると結論づける（cf.『国家』602C）。そして、詩人もまた画家と同様に真理とはかけ離れた仕事をしているとみなされている（cf.『国家』603C-D）。

以上の議論は、真理を遠ざけ、理想的国家にとってふさわしくない詩人を排除すべきだとする〈詩人追放論〉の論拠であり、芸術家に対するプラトンの厳しい態度がうかがい知れる。カッシャーは別の文献において、プラトンのこの芸術観を痛烈に批判している。その文献とは、講義録 „Eidos und Eidolon. Das Problem des Schönen und der Kunst in Platons Dialogen“（「形相と幻影：プラトンの対話篇における美と芸術の問題」、以下、「形相と幻影」）（1924）である。この講義録は、Fritz Saxl 編の『ヴァールブルク図書館諸講義』第二巻に収められ、講義がおこなわれた時期は1922年から翌年1923年にかけてであり、1923年発行の『シンボル』第一巻と時期的に重なる研究である。それゆえ、同研究は、『シンボル』第一巻におけるカッシャーの模写説観を知るうえで重要なものであると言える。

「形相と幻影」におけるカッシャーによるプラトンの芸術観批判を具体的に見るとしよう。「芸術家の活動は、ソフィストの活動と同様に、模倣 [Nachahmung] という共通的一般概念であるミメーシスに包含され、この一般概念によって軽んじられるのである」（ECW 16, 149）。「プラトンは芸術をミメーシスの圈内に追放し、その中で制限しようとしたのである」（ECW 16, 159）。そして、カッシャーは最後にこう結論づける。「プラトンの体系は、自らの哲学的美学を知悉していないどころか、その可能性さえも知悉していない」（ECW 16, 162）。このように、カッシャーはプラトンに対して通俗的な批判をおこなっている。たとえば、カッシャーの同時代人であるアウエルバッハが、ヨーロッパの文学史を貫く概念としてミメーシスを再評価していることを考えれば、カッシャーによるミメーシスの見解は魅力に乏しいと言えるかもしれない<sup>2</sup>。また、カッシャーによって単純化された「形相と幻影」におけるミメーシス観は、同時期に執筆され、一般論として語られた『シンボル』第一巻の模写説観とその通俗さにおいて似通っていると言える。それゆえ、シンボル的な記号の在り方を際立たせるために、カッシャーは『シンボル』第一巻において故意に単純化して模写説批判をおこなったのではないかという疑惑さえ湧いてくる。

<sup>2</sup> 実際に、Verdenius（1949）のように、プラトン哲学が芸術的な体系をもたないという見解は過去のものであるとする議論がプラトン研究者の中で存在する。Verdenius（1949）を邦訳している渡辺義治による同文献の訳注によれば、諸学者と並んでカッシャーによるプラトンの芸術観批判がもはや古い見解であり（cf.邦訳: 54-5）、また、渡辺による訳者あとがきでは、カッシャーたちがプラトンの芸術観を「偏狭な写実主義」（邦訳: 75）と断じてしまっていると述べられている。

しかしながら、その疑惑は誤っている。というのも、カッシーラーはミメーシス的な在り方そのものを貶めているのではなく、シンボル的記号の発達に必要不可欠なものとして自らのシンボル哲学に取り込んでいるからである。そのことを次節で明らかにするとしよう。

## 2. 模倣におけるシンボルのはたらき

『シンボル』の序論では、カッシーラーの議論の運び方が、模写説を拒絶しているように見受けられた。だが、その見方は正しくない。

本節では、まず、カッシーラーが模写説を斥けて提示したシンボル的記号の在り方についての再検討をおこなう。カッシーラーが単純化したように思える模写説においては、記号はけっして原物をありのまま描写することはできないとして、その価値が貶められているのであった。カッシーラーはこの在り方を逆説的に捉える。カッシーラー自身も、記号が現実の豊かさに比べて内容として劣っていることは認める。そう認めたうえで、内容を脱落させたことによって記号が力をもつようになるとカッシーラーは考えるのである。

すなわち、記号がその価値をもつのは、具体的・感性的な個々の内容とその直接眼前にあらわれている状態のうち記号によって抑圧され脱落させられるものにおいてなのだ、と。(ECW 11, 42)

このようなシンボル的記号の在り方の具体例をカッシーラーは挙げている (vgl. ECW 11, 43)。カッシーラーによれば、たとえば、化学式はもはや具体的な物質に対して直接的な観察によって得られる内容を示してはいない。しかし、化学式は、物質や分子の構造を抽象化して示してみせることで、法則性や可能的反応といった高次の情報を伝達可能にしているのである。このとき、塩化ナトリウムの形状の具体的な描写（立方体である、など）は削ぎ落とされているのであるが、そういう個物の表現は法則的結合の全体と結びつけられ、特徴を描出 [Darstellung] するという特性を新たに獲得している (vgl. ebd.)。

『シンボル』の内容を概略して言えば、素朴な観察とともに生まれる記号から、もはや具体物を示すものではないが、（化学式が化学的体系に位置づけられるように）体系の中で関係性を示す記号への発展を記述している、ということになるだろう。

以上のことから推測できるように、カッシーラーは、たしかに模写説を批判したが、シンボル的記号の原初的段階において、単なる観察からの記述といったミメーシス的な在り方がかかわっているのである。以下ではそのことを示していきたい。

本稿第1節で筆者は、カッシーラーが言うところの模写説が、プラトンの芸術観に依拠したものである可能性を示した。その仮説を補強するものとして、『シンボル』第一巻・第二章において、カッシーラーが許容する模倣について、アリストテレスを参照していることが挙げられる。アリストテレスは師・プラトンとは異なり、ミメーシスを評価した。アリストテレスは、芸術においてのみならず言語においてもミメーシスが適用されると考えた。

ところで言語表現に刺戟を最初に与え始めたのは、自然本性上そうであるように、詩人であった。というのは名称は〔事物の〕模倣物であり、そして声もわれわれに備わっているいろいろな部分のうちで一番模倣的なものであった〔しかるに詩人はそれらを以て事物を模倣するのがその目的であった〕からである。(『弁論術』, 1404a, [ ] 内の補足は邦訳者による)

すなわち、アリストテレスもまたプラトンと同様に、詩人がミメーシスを仕事とする人たちであることは認めているのである。そう認めたうえでアリストテレスは、ミメーシスを評価するのである。

また、カッシーラーは、アリストテレスの『命題論』を注釈で引用している。「いかなる名称も自然によってそのようなものではなく、シンボル [σύμβολον]<sup>3</sup>となるときに名称となるからである[……] (『命題論』, 16a, ECW 11, Kapitel II, Abschn. I, Anm. 9)。ここからカッシーラーは、アリストテレスに次のことを読み込む。すなわち、言語表現は模倣の産物であるが、それと同時にシンボル的記号でもある、と。そして、カッシーラーは次のように結論づける。「このように理解された μίμησις [ミメーシス=模倣] はそれ自身すでに ποίησις [ポイエーシス=創作]、つまり創造し造型する活動の領域に属しているのである」(ECW 11, 129, [ ] 内の補足は邦訳者による)。ここで言われているポイエーシスこそ、シンボル的記号の創造にはかならない。つまり、模倣の産物は、常にすでに原物の特徴を際立たせており、その「輪郭 [Umriß]」(ebd.) が削り出された形式で提示されている。

[……] 模倣そのものがすでに描出 [Darstellung] への途上にあることになる。描出においては、客觀はもはや単に出来上がった形象というかたちで受け容れられるのではなく、意識によってその構成的な基本的特徴にもとづいて構築されるのである。(ebd., 強調は原著者による)<sup>4</sup>

模倣は、意識による構築物——すなわち創作物——なのである<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> アリストテレス自身がここにおいて、Symbol の語源である σύμβολον/symbolon という語を用いていることから、Symbol というカッシーラーによる翻訳によって彼の解釈が入りこんでいるわけではない。なお、σύμβολον の語を、The Loeb Classical Library の希-英対訳版で訳者の Cook は symbol と、Felix Meiner の希-独対訳版で訳者の Zekl は Ausdruck とそれぞれ訳している。

<sup>4</sup> 描出 [Darstellung] 概念の重要性を強調しておきたい。Darstellung の文言は、化学式がもつ機能としてすでに登場していたが、この言葉には〈抽出〉という意味もあり、ある対象の特徴を浮かび上がらせるために何かを脱落させることを指す。つまり、この言葉そのものがシンボル形式の在り方に深くかかわっている——ゆえに、重要である。また、Burwick (2001) は、「シェリングは対象の単なる「模倣」["copy" ("Nachahmung")] とその〔模倣の〕所産における自然の観念の「描出」["representation" ("Darstellung")] を区別している」(25) と指摘している。カッシーラーにおいてもこの区別は維持されているが、その区別は程度の差であり、彼自身による説明とあわせて考えれば、模倣もすでに原初的な描出だという結論になるだろう。

<sup>5</sup> これと同じ発想は、Fritz Saxl 編の『ヴァールブルク図書館諸講義』第一巻に収められた講義録 „Der Begriff der symbolischen Form im Aufbau der Geisteswissenschaften“ (『精神科学の構成におけるシンボル形式の概念』) (1923, 講義時期は 1921-1922) にも見られる。「芸術的創造の最初の段階でさえ、いかなる種類の「模倣 [Nachahmung]」からも厳密に切り離されている」(ECW 16, 86)。この箇所でカッシーラーは、ゲーテの芸術の進展の三分法を援用し、そのうちの第一段階である「自然の単純な模倣」であっても、その「対象への忠実さは、同時に対象への制約 [Einschränkung] でもある」(ebd.) と述べている。つまり、芸術的創造の最初の段階においても、ありのままの模倣ではありえず、制作者によって制約されたものの写し取り (一種の創作) になっている、ということである。

しかしながら、だからと言ってミメーシスをシンボルと完全に同一視するのもまた、誤りである。次節では、本節の内容を踏まえてミメーシスとシンボルの関係について明らかにする。

### 3. ミメーシスとシンボルの関係

カッシーラーは、模写説を斥けながら、ミメーシスそれ自体は否定していないのであった。そうではなくて、ミメーシスは常にすでに原物を象っており、それゆえ創作物であり、シンボルなのであった。ここにおいて、ミメーシスの概念はシンボルの概念に包摂されている。この包摂の仕方を明らかにするのが本節の目標である。

カッシーラーは、ミメーシスが重要性をもつのは、言語のシンボル的記号が原初の段階にあるときに限ってのことであると考えている。カッシーラーは、発達心理学を参照し、子どもの言語の獲得の最初の段階が身振り [Gebärde] にあるとし、身振りには指示する身振りと模倣する身振りがあるとする (vgl. ECW 11, 125f.)。そして、カッシーラーは、身振り言語 [Gebärdensprache] の議論を言語集団や文化の規模にまで拡大させる (つまり、カッシーラーは、人間の言語発達と言語集団・文化におけるそれを相似関係のもとで捉えている)。たとえば、インド・ゲルマン諸語において、基礎的な語彙である〈言う〉が、もともと指示をあらわすものであった、などというようにして。だが、ここで一層重要なのは、模倣の身振りである。カッシーラーは、指示の身振りと同様、さまざまな言語集団において、現代で言うところのパントマイムのように、直接的・感性的な模倣の身振りが見られるという (vgl. ECW 11, 127f.)。しかし、ここでカッシーラーが重要だと考えているのは、身体によって直接原物を再現するという一見直接的・感性的な側面が強いと思われる模倣の身振りでさえも、シンボル的な要素が含まれているということである。つまり、直接的に再現を試みる模倣の身振りでさえ、原物の一部を捨象し、それを創作物 = シンボル的記号につくりかえている、ということである。たしかに、人類史的にあとから登場した文字によって伝達される言語に比べて、模倣の身振りは直接的・感性的な要素を強くもっているが、それは部分的にやはりシンボル的でもあるのだ。

また、模倣の身振りが直接的・感性的であるというとき、対象の在り方を受容し再現するという意味でその行為そのものと行為主体の人間精神は受動的である。この点について、模倣の段階で完全に受動的なのか、あるいは概ね受動的ではありながらもすでに精神の能動性が見いだせるのかに関しては先行研究において議論が分かれている。Matherne (2021) は、ミメーシス的 [mimetic] 段階では精神は受動的であり、続く類比的段階に移行することによって精神が自らを主体として自覚するという解釈を提示している (cf. 144-5)。それに対し、齊藤 (2011) は、「[……] 彼 [カッシーラー] にとって「模倣」とは、単に受動的な行為なのではなく、むしろそこでは精神の能動的な活動を前提とした精神の生成活動が見出される」(44-5) と述べ、ミメーシス的段階にも先駆的な能動性が見いだされると解釈している。「[……] 模倣そのものがすでに描出の途上にあることになる」(ECW 11, 129) というカッシーラー自身の記述を思い返せば、齊藤 (2011) の解釈が妥当であろう。

カッシーラーは『シンボル』全体を通して、(ひとまず第二巻の神話に関する議論を除けば、)

身振り言語から、音声言語、科学的記号への発展を叙述しており、そのどの段階においても記号はシンボル的である。だが、〈直接的・感性的かシンボル的か〉、および〈受動的か能動的か〉という二種の二項の比重が遷移しつづけており、記号の発展とともにシンボル的要素および能動性が増大していくのである。

#### 4. 音声言語におけるミメーシス

本節では、身振り言語が発展を遂げたあととのミメーシスの在り方について検討する。身振り言語が音声言語へと発展を遂げたあとも、ミメーシス的表現はなおも残存しているとカッシーラーは考える。カッシーラーによれば、ミメーシス的表現 [mimischer Ausdruck]（すなわち、直接的・感覚的表現）は、前節で述べたのと同様、幼児語やプリミティヴな言語集団の言語<sup>6</sup>によくみられる（vgl. ECW 11, 137f.）。この段階では、身振り言語に替わり、音による模写が目立ってくる。いわゆる擬音語 [Lautmalerei] である。16, 17世紀の言語哲学において目標とされたアダムの言葉の探究——すなわち、言語起源論の検討——も、この擬音語の研究を柱の一つにしていたように、擬音語が音声言語の基層をなしているという知見は、カッシーラー以前の言語哲学においても共有されていた<sup>7</sup>。

以上の段階までは、各擬音語は個別のものにすぎない。そののち、音の高低や音調によって言語表現のあいだに法則性が生まれ始める（音調を変えることで動詞の肯定形が否定形に変わる、など（vgl. ECW 11, 142））。この段階は、類比的表現 [analogischer Ausdruck] の段階である。カッシーラーは、類比的表現に見られる語頭音節反復（畳語）[Reduplikation] に着目する。カッシーラーが言うように、一見この語頭音節反復は、対象ができるだけ忠実に再現するための反復であるかのように思われる（vgl. ECW 11, 143f.）。あるいは、先に見た擬音語と大した違いがないとみなされたり、繰り返しによる単なる強調とも捉えられたりするだろう。しかしながら、各言語で見られる語頭音節反復は、文法上のカテゴリー、あるいはクラスの移行の契機となっている。一例を挙げると、日本語において、動詞「休む」の畳語である「休み休み」は副詞としてのはたらきをもつようになっている（cf. 清海 2022, 23）。カッシーラーはさまざまな言語における語頭音節反復で語彙のこの種の変換がおこなわれることによって、言語の多様性が格段に向上すると結論づける（vgl. ECW 11, 146）。言語が何かを指示したり模倣したりするといった点で、身振り言語やミメーシス的表現は、その写実性にかかわらず、現実と照応している。現実との照応という点からいえば、類比的表現はむしろ退行しているが、表現間の対応関係を示しうるものとなっている。この傾向がさらに強まると、シンボル的表現に至る。

<sup>6</sup> プリミティヴな言語表現であってもシンボル的だとは述べられているものの、シンボル概念というカッシーラーが導入した概念を基準にしてそれらの言語表現を未発達だと断ずる行為そのものが問題含みであることを指摘しておかなければならない。

<sup>7</sup> たとえば、Paul (1880/1995) は、後期中高ドイツ語の語彙の観察結果から、(第二次的な発達により擬音語の印象を与える例があるとしても、) 擬音・音声模倣 [Lautnachahmung] が言語の原始的創造の領域とかかわっていると断定している（古いゲルマン語の方言、ギリシア語、ラテン語についても同様だという）(vgl. § 125)。

言語は音声記号の多義性という欠点を独自の長所と化してしまう。というのは、この多義性そのものが記号を単なる個体的記号にとどまらせないからである。まさしくこの多義性こそが、個々に「表示する」という具体的な機能から、「意味する」という普遍的かつ普遍妥当的機能へ移る決定的な一歩を踏み出すよう精神に強いものなのである。この機能においてこそ言語は、いわばこれまで身にまとっていた感性的な外皮 [Hüllen] を脱ぎ切るのだし、ミメーシス的ないし類比的な表現が純粋にシンボル的な表現に座をゆずるのだ。(ebd.)

ここまでカッシャーのミメーシスとその周辺についての考え方を概観すると、ミメーシスの表現や記号のミメーシス的な在り方は、シンボル的表現や記号のシンボル的な在り方の始源ではあるが、克服されるべき対象であるかのように思われる。実際に、カッシャーが『シンボル』においてこの先で叙述していくのは、直接的・感性的な要素から離れて高度化する言語記号や科学的記号であり、それらは『シンボル』の論旨に沿った真のシンボル的記号とみなされている。しかしながら、『シンボル』第三巻には、言語の始源への立ち返りについての記述が見られ、始源として言語は重要なのである。次節ではその箇所を中心に検討をおこなう。

## 5. 言語の地盤——ミメーシスへの立ち返り

本節では、『シンボル』第三巻における言語記号と科学的記号の関係について論じられている箇所を検討し、『シンボル』の論旨が、〈言語記号から科学的記号へ〉という単なる進歩史観ではないことを明らかにする。

『シンボル』第三巻は、「認識の現象学」と題され、言語・神話的思考に続いて、科学のシンボル形式が扱われている。本節では、第三巻の中でも、科学のシンボル形式と第一巻で扱われた言語のシンボル形式の関係について論じられている第三部・第三章「言語と科学——物の記号と秩序の記号」の内容を検討する。

前節で言語においてミメーシス的表現や類比的表現がシンボル的表現へと発展する際に、カッシャーは、「外皮を脱ぎ切る」(ebd.) という比喩を用いていた。これと類似した比喩は、別の箇所でもシンボル的記号が発展する際に用いられている<sup>8</sup>。〈脱皮〉は、前の段階のシンボル的記号に、次の段階のシンボル的記号の萌芽が含まれていることを意味する。すなわち、前の段階のシンボル的記号と次の段階のシンボル的記号は、潜勢態 (デュナミス、カッシャーの言葉では、Potentialität) と現勢態 (エネルギー) の関係になっているのである。このとき、潜勢態において萌芽となっているものは、シンボル的な在り方にほかならない。本稿第3節でみたように、身振り言語という言語の始源に最も近い潜勢態でさえ、ポイエーシスというかたちでシンボル的な在り方を秘めているのであった。

潜勢態から現勢態への〈脱皮〉は、言語内部におけるシンボル的記号の発展のみならず、シ

---

<sup>8</sup> たとえば、カッシャーは『シンボル』第三巻において、論敵のカール・フォスラーの比喩に引きつけられたかたちではあるが、言語から論理的概念への移行を「[……] 外皮 [Schale] を突き破る [durchbrechen] [……]」(ECW 13, 385) と表現している。

ボル形式自体をまたいで言語から科学へと発展する際にも生じる。しかしながら、このとき、シンボル的記号がけっしてたやすく〈脱皮〉を遂げていくわけではないとカッシーラーは考へている。

すべての厳密科学は、思考が言語の強制から解放され、言語から自立し大人になることを要求する。しかし、この解放 [Befreiung] の作用もまた、言語の世界にまったく背を向けては果たされえない。言語が歩んできた道を捨て去ることはできず、その道を終極までたどり、この終極を越えてさらに歩みつけなければならないのだ。[……] いまやこの〔言語の独自の発展に際して動機としてはたらいていた一つの〕傾向がそのままの力と純粹性において仕上げられ、いわばその單なる潜勢態 [Potentialität] から解放され、その完全な現勢態 [Energie] へと移し入れられるのだ。だが、そこには同時に、いま成立したこの新たな精神的現実にしても、つまり純粹に科学的な概念という最高の現勢態<sup>9</sup>にしても、依然として秘められた紐帶 [Band] によって言語に結びつけられている、ということも含意されている。[……] やはり概念は結局のところ、つねになんらかの仕方で、おのれが言語のもとでもつていたあの「世俗的－地上的 [welt- und erdgemäß [en]]」な道具へ立ちもどってゆく。言語からの解放の作用は、[……] 依然として言語そのものによって制約され、言語そのものによって媒介されているということが明らかになる。(ECW 13, 378f.)

〈脱皮〉は引用箇所の冒頭では、解放 [Befreiung] と言い換えられており、自由 [frei] になるとという意味で肯定的に語られているように思われる。しかし、その見方は一方では正しくても、引用箇所の後半部を解釈すれば、別の側面では正しくない。後半部によれば、科学がいくら発展したとしても、言語の始源との紐帶 [Band] を忘れてはならないのだという。つまり、シンボル的記号としては未熟であり、科学的記号に比べてミメーシス的要素を残しているにもかかわらず——むしろ残しているからこそ——、言語記号は重要である。抽象化が進展した科学的記号は、単に何かを指示したり模倣したりする類の記号ではなくなる。ゆえに、科学的記号は宙に浮き、歴史的基礎づけを失いかねない。そこでシンボル的体系の全容を大地と樹木に喻えるならば、ミメーシス的な要素をより多く保持する言語を地盤として、その上に成立する幹、枝、葉のようなものとして科学的記号を捉えるべきだとカッシーラーは考へているのである。それゆえ、カッシーラー哲学において、ミメーシスはけっして斥けられることはなく、シンボル的体系の中に位置づけられ、いわば〈根〉としての重要性を与えられているのである。

### 結びに代えて——記号の発展史としての『シンボル形式の哲学』

ミメーシスはシンボル的記号の発展の出発点として重要であるというのが本稿の結論である。

---

<sup>9</sup> 本論からは外れるが、ここで述べられている「最高の現勢態 [höchste Energie]」が、エンテレケイア [Entelechie] のことを指しているのか否かは、重要な論点の一つになるであろう。というのは、この論点が、発展の終極までたどり着いたシンボル的記号をカッシーラーが想定していたのか否かという問い合わせにつながるからである。

本稿でも改めて確認することができたが、『シンボル』の最も重要な特徴は、記号の発展の動的な記述にこそある。

Endres (2021) は、カッシーラーのシンボル哲学における〈ミメーシス的表現から類比的表現、シンボル的表現へ〉という発展を、シンボル的機能と段階の二つの図式〔schema〕のうちの、図式1とし、シンボル哲学の体系の整理を試みている (cf. 124-133)。彼は、同じく発展史の要素をもつハーゲル哲学に触れ、シンボル哲学と比較している。それによれば、ハーゲル哲学を駆動させている原理に相当するものをカッシーラーのシンボル哲学がもっていないように一見思えるものの、ハーゲル哲学のような学問的に抽象的に基礎づけられるものではないが、純粹にプラグマティックな根拠がシンボル哲学にあるという (cf. Endres 2021, 130)。Endres (2021) がここで〈プラグマティックな根拠〉と表現しているものは、音声記号や文字といった物質的な実例の変遷である。この変遷をもって根拠とするのは、古典哲学の観点からは体系の基盤として薄弱に映るかもしれない。しかしながら、ハーゲルをはじめとするドイツ古典哲学を記号論・言語哲学に変換した——一種の言語論的転回——として、カッシーラーの哲学体系は哲学史上の画期をなしている。

このようなカッシーラーのシンボル哲学を貫く原理の整理・明示化は、重要な課題である。とりわけ、『シンボル』の中で記号の発展史の起点としてのミメーシスの重要性については、引き続き考察を深めていく必要がある。

(いわもとともたか 哲学哲学史・博士後期課程)

### カッシーラーの著作略号一覧

カッシーラーからの引用・参照は、ハンブルク版全集 (*Gesammelte Werke, Hamburger Ausgabe*, Hrsg. von Birgit Reckl, Felix Meiner Verlag, 1998-2009) を用い、その表記法にしたがって ECW の後に巻数を付した。同全集の頁数については、併記されているブルーノ・カッシーラー版の頁数ではなく、ハンブルク版自体の頁数を付した。また、本稿で扱った全集の巻と既存の邦訳の対応は以下の通りである。引用の際には、邦訳が存在するものに関しては、原典を確認したうえで邦訳を用い、必要に応じて引用者が一部表現を改めたり補足を加えたりした (引用者による補足は[] (二次文献に対しても同様) で、改訳は下線で示した)。邦訳が存在しないものに関しては、引用者が翻訳を施した。

**ECW 11** : 『シンボル形式の哲学 [一] 第一巻: 言語』、生松敬三・木田元訳、岩波書店 (岩波文庫)、1989年。

**ECW 13** : 『シンボル形式の哲学 [四] 第三巻: 認識の現象学 (下)』、木田元訳、岩波書店 (岩波文庫)、1997年。

**ECW 16** : *Aufsätze und kleine Schriften [1922-1926]*, 邦訳なし。

## 参考文献

プラトンとアリストテレスの著作に関しては、The Loeb Classical Library の希－英対訳版を用い、引用は既存の邦訳にしたがった。また、カッシャーラーが『シンボル』の当該箇所で引用して取り上げているアリストテレスの『命題論』に関しては、Felix Meiner の希－独対訳版も参照した。

Aristotle, *The Categories, On Interpretation*, translated by Harold P. Cook, in: *The Categories, On Interpretation, Prior Analytics*, edited by T. E. Page, et al., published by Wiliam Heinemann Ltd., London, and, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1938/1962. (Aristoteles, *Hermeneutik oder vom sprachlichen Ausdruck (De interpretation)*, in: *Organon*, Band 2, Hrsg., übersetzt, mit Einleitungen und Anmerkungen versehen von Hans Günter Zekl, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1998.) (『アリストテレス全集 1』、山本光雄ほか訳、岩波書店、1971 年)

Aristotle, *The “Art” of Rhetoric*, translated by J. H. Freese, in: *The “Art” of Rhetoric*, edited by T. E. Page, et al., published by Wiliam Heinemann Ltd., London, and, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1926/1967. (『アリストテレス全集 16』、山本光雄ほか訳、岩波書店、1968 年)

Burwick, Frederick, *Mimesis and Its Romantic Reflections*, The Pennsylvania State University Press, University Park, PA, 2001.

Endres, Tobias, *Phenomenological Idealism as Method: The Hidden Completeness of Cassirer’s Matrix of the Symbolic*, in: *The Method of Culture. Ernst Cassirer’s Philosophy of Symbolic Forms*, edited by Luigi Filieri & Anne Pollok, Pisa: Editioni ETS, 2021, pp.121-147.

加藤好光「『ミメシス』の四つの意味契機——『国家』におけるプラトンの詩人批判に寄せて——」、東京大学文学部美学藝術学研究室編、『研究』、第 12 卷、1994 年、所収、pp.75-105。

清海節子「重複と類像性 (iconicity) ——置語が表す類像的意味とその他の意味—」、駿河台大学総合研究所編、『駿河台大学論叢』、第 63 号、2022 年、所収、pp.15-30。

Matherne, Samantha, *Cassirer*, Routledge, Abingdon, Oxon, and, New York, NY, 2021.

Paul, Hermann, *Prinzipien der Sprachgeschichte*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1880/1995. (ヘルマン・パウル 『新装版 言語史原理』、福本喜之助訳、講談社 (講談社学術文庫)、1993 年)

Plato, *Republic II*, translated by Paul Shorey, in: *Plato in Twelve Volumes*, Vol. VI, edited by E. H. Washington, published by Wiliam Heinemann Ltd., London, and, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1935/1970. (プラトン『国家』(下)、藤沢令夫訳、岩波書店 (ワイド版岩波文庫 206)、2002 年)

齊藤伸『カッシャーラーのシンボル哲学——言語・神話・科学に関する考察——』、知泉書館、2011 年。

Verdenius, W. J., *Mimesis: Plato’s doctrine of artistic imitation and its meaning to us*, Philosophia Antiqua III, Leiden E. J. Brill, 1949. (ウェルデニウス 『ミメシス——プラトンの芸術模倣説とその現代的意味』、渡辺義治訳、未來社、1984 年)

\* 本研究は JSPS 科研費 JP23KJ1426 の助成を受けたものです。

## Mimesis and Symbol

Their Importance in Cassirer's Philosophy

Tomotaka IWAMOTO

Cassirer (1874-1945) criticized copy theory [Abbildtheorie] in the Introduction and posed problems in Part I of *The Philosophy of Symbolic Forms* (1923) to reinforce his symbolic philosophy. Copy theory undervalues the ability of signs because the latter cannot precisely represent their objects (cf. ECW 11, 41f). Cassirer accepted that symbolic signs omit the materials of their objects; however, he assumed that they acquired new expressive abilities, which are their distinguishing features. The copy, that is, the mimesis [μίμησις], has been discussed since ancient Greece. Plato explains that the true nature of art is mimesis, whereas poets only achieve superficial mimesis and cannot engage in genuine mimesis (cf. *The Republic*, Vol. 10). In *The Philosophy of Symbolic Forms*, Cassirer does not describe the person who advocates the copy theory that he refers to or criticizes. Therefore, we, as his readers, must trace his thought process. To reconstruct Cassirer's outlook on copy theory, we must peruse not only *The Philosophy of Symbolic Forms* but also the records of his lectures, which reveal that Cassirer appreciated mimesis. In Cassirer's symbolic system, mimesis is compared metaphorically to the "root" of a "tree."

「キーワード」

カッシラー、ミメシス、シンボル、言語、古代ギリシア